10
75
11

日本絵類考

八

日本絵類考巻八

目録

書々絵
瓦板絵
ポンチ絵
絵そらき
写真絵
相撲画
武者絵
化物絵
剳物絵
新聞挿画
絵名札
絵引
写生画
能狂言絵
金々郎絵
宝船絵

大黒絵
山水画
錦絵山水
文人画
彩色
人物画法

春画
金碧山水
粗画密画
没骨画
裏彩色

日本絵類考巻八

描き絵

描き絵は紙を折りて種々の物象を作り折り本
一冊を絵をうつしもるなどのごとくにして取となる描き絵最古きものなるべし歌川芳
藤善く描き絵を以る劇場の背景を画きおもき一
幕二ツ三ツとかかるものなど出来

割物絵

割物絵ハ寸法割ヲ出シテヨリテ画クモノヲ云フ
ハ以上書飾北斎此ノ技ヲ妙ヲ極メ拙著北斎仔ヨ
或画工ノ話ヨ源也絵師ノ専門語ヨ割出シ一ヨ
割物トリヨ云テ即角物ト丸物ノ割合ヲ云
何ノ術ヨヨリテモ浮ヲヨリ此以ヨ云ハ
名ヲヨリテモ腕ト筆トノ工合ノヲヨリテ画キ証
きモノ云テ北斎ハヨク此割出シヨ精シクテ
き絵草紙問屋某ノ武人ノ嗤ヒテ一也半國ノ
許ヨ来テ絵馬ヲ画クニヲ請

二年國語にて直よ重き姫をにの韜ありて華と
校にて曰く容易ふ似て容易ふあらず緊急の需
よ應にて能にと其止むを得て去りて北南の評よ
行き亘らんこと欲す話よ最真ふ著へて割物ふ且
ハ明日集まりてといふ約の如く重きたる法よ
こ且をなき嘆にて曰く北南よ五ハきる支圭に
と北南ふ亘本晴重よ左の割出に依を載を

兎版重

兎板重ハ兎よ重きことを彫りて板木ふくり搨
をなすことを以よ固らを木板よりも容易よ製に洋
らうそのなを故よ昔好ハ競場方角消あると称
へ前表の中英社場所を兎板ふに當日妻をかる
きたる又板本師二板さんから来ふ報知をんとする
こ且を古人ふ報知さんとするを以て報ハきた
を兎板ふなにて兎板の品古きハ大板落
梯の好の重ふにて南好市中を妻をかもきたる
とそ古人訂彩氏こ且を兎をて大板外年間とあ

新聞挿画ハ浮世絵師歌川國芳の門人落合芳幾
と相前後して其の門人年方年宗
芳こと画き現今よく画くものを一流の
画流のくくも亦これ
ハ大ふ画才を要をしもつて大抵を
かくよふ南を筆尖絵師の輩を招くと雖ハ

ポンチ絵

ポンチ絵は西洋の一種の戯画にて或は長き顔を或は大口鼻小眼の形状人間ある
らざるも妙ふ其の癖所を捉て情態を写一笑を
人をして笑へしむるにあり笑を
謎画の如きものを現今切
も国と称す善く
布望の如く書
此即南畝の
も形容して頗

ポンチ画を画きたるを称ふ
川柳狂歌の条に
仮顔ふ
ねさまざまれ
ポンチ画の類なり

絵名札

絵名札ハ名札紙の中へ先ツ諸國を表き其の国の中へ己ノ姓名をかきそれを即席袋を表き其の腹の大なる所へ姓名の文字をかゝの類ニて明治十二三年の比絵名札ハ未國ヨリ流行ニ我ノ雑貨市中ニ盛ニ行ハるゝ為メ巨利を得るもの有てそれを見て絵名札よりも文ニて絵名紙おもて包紙ふくろの絵名札の如き絵を印刷するもの未國ふうそう

緒引

緒引ハ索引ニ對シテ一ツノ事柄ト一ツノ事柄ト即諸物ノ
形狀ヲ書冊ニ表ハシ其ノ物ノ主ナル點ヲ指示シテ其
緒引アルヲ以テ名ケタルモノニシテ西洋風ニ比
一緒引ヲ他ニ參照セシムル約ヲ見ルニ於テモ

絵葉書

絵葉書ハ郵便ヲ以テ現今欧洲諸国ニテ盛ニ行ハルル我国ニテモ本年八月一日ヨリ郵便規則ヲ改正シテ絵葉書ヲ許ス事トナリ従来ハ絵葉書ハ八條ニ云ク政府ノ発行スル通常葉書ト同一ノ法及ヒ紙質ヲ以テ製シ且ツ其ノ一面ニ郵便切手ヲ貼付シ又ハ之ヲ印刷シ其ノ他ノ一面ニ通信ヲ記スルモノヲ謂フト定メタリ然ルニ近来ハ私製葉書ニ通常葉書ト看做ス旨ノ規定ヲ設ケラルルモノハ

才一種郵便物と同一の取扱ひをなす
故の事ありて印刷器械の私製葉書の公許されざる上は定めて葉書も亦世の歓迎者の算賀快楽の時候見舞等に用ひらるゝ百花の畑焼き出でゝ種々の絵をうつきのさなどうらを呈せつゝ忙しき前ぶれとなりて絵葉書の流行一段と盛ならんもの多く書簡の代用をなすに至らんか此の絵葉書と郵便とは密接の関係ありて互に相離るゝ能はざるものなり

―絵葉書より郵便を引いて今の如く今日の盛を致すに至りたるが如く故郷の人より送り来る絵葉書の裏面の書き様一絵葉書を通じての参考より得たり―

日本橋一丁目一番地　金港堂

白く花の輪郭を着色あらざるは半月を白と淡黄みを以て空を浸き蓋あるを文句より「本機種は如何にも今日の五月の五日にて僕は柏餅の食へたくなつて此の葉書を出すなり四里

川辺の半ヲ二こと〻い和蘭かある古人ら〻寿
一絃を弄ひて手部の郊外のけしき、かな吉岬
羊ら〻して水ほのうよを郷よ僧半の秋い部ら或
い郎をあて遥よ大厦高楼の影を宇宙亜様い
水彩画て印刷い所謂三色板かて和蘭の大家
の筆なりと〻ふ「連日の霧雨ふ鉋果てやら其上
一雨〳〵ふ寒〳〵なるい被ふ重ねもて今日
い和蘭国のあて一すけ用ふうけ申ら僕
い佛蘭西絵の警古を始そう其六ヶ安まふハ
頓と用ひ為〳〵不税」と書ま〻そ

寒雁ヲ之ヲ林の絵そうきハ佛蘭西の折絵そうき
なて紙面ふ割ふ音雁の片脚貼付ててかた
を始〳〵と日時ふ一脚ヲ〳〵天ふ翔そる仕組ふか
ヲ我見て渡鳥なる被国の凡をそる〳〵

寫眞

寫眞術の我國へ傳りしは文久元治の頃なり
弘化嘉永年間江戸下谷に住せし幕府の士人曲
渕甚吾長時なる者蘭書を譯して寫眞を研究
術を研究せしが病にて止む亜人新川也芳
いけの人より始めて西洋の亜法を研究せしと也
村文治なる物語りて文久元治年間横山松三郎
田九一の諸氏寫眞術を研究し始めて眞板と
その寫眞を製し西洋の器械を輸出し紙
に寫眞を製するも横山氏始めて其

の術を研究一遂ふに用ひる藥品ま
も製〳〵其の板數參拾餘枚を製出
乾板ものゝ又光線板と製出〳〵真の技術を
巧なる之ら〳〵て其の技術家の一助ら〳〵てる
月報寫真鏡報第參拾壹號參照
ふ如きを
寫真鏡報弟一號ふ寫術小史と題〳〵て曰く學
者曰く寫真術ハ光線ふよりて物象を畫くの術
なりと思〳〵てこと信なりん然ハ吾輩人間
の祖先なるアダム氏もエバ
と口舌ふ寫ふ寫真術弟一の發明者たりん氏いこと
日形なる影の常ふ留ふ接近〳〵近〳〵寸ふ
さうと爲ふ百方遊ぶんこうを試ふたるも日
沒ていハ真形の消へて跡なきを
〳〵着ふ於て初て妄想のおこりを
唯ての影をおそれたりてよ止やれとも爲ふ
天然の美を愛するの心ふ光線の至りる不
可思議の影を永久ふ
たる人〳〵擧出〳〵而〳〵て諸氏の功績ハ
吾人ら〳〵て相互の苦を濟ふなり〳〵ん旦生活上

外物の對側に重像を白屏上に映出せしむるものなり此の裝置に於て一個の凹鏡を嵌入したる對側にて遮ぎらるゝ物像を映出せしむるものなり如何となれば凹鏡の焦點外に於ては物像の轉倒は其の助力の爲めよく働くも焦點内に於ては物像の轉倒は其の助力の爲めに却て妨げらるゝを以て未だ絶對的の成績を擧げ得ざるものなればなり

て感ハフアブリカストいふ人にて其の本
業なる鍊金術より必用なるフイロソファースト
ーンの研究中偶然塩化銀と奈良ーこうと年ふ
き表面より塗布しレレズの力をもつて其の上より
射映さゝなる重像ハ何ふる種影を同ふ如く天然
の濃淡をもつて写真と石白色ふ印重せらる
まふう如何なる薄ふしも是亦た光線ふて路
程ハを為ふて消去ておる補へ掃ふるもの
も遠ふこふを考ふるもて蓋しゐハ元泉鍍金
属と書ーて黄金ふあふもらて画面の薬を造ふ

んとする鍊金家ふれハ便なき影を捉へんとも
事実便ある何物をも求めんともよ況んや
いなや〇一千七百六十年より於てノルウエー国
ローテ市の人トリファイレ氏いふ言へらく粗布
の上より横布さゝたるある和蘭の舎剣ハ其の上
ふ射映さゝとふる天然の重像をそへふく永遠
ふ之を止むることあらんと妄想ふらて去け
らゞたてゝ亜ゝも氏ハ性雑荷ふーて其の紀
を試さゝそーう将和蘭を学ばんうたふよ其の
他を言わさるをハ判定ーうふーと雑君ふ角

歸保い再い其の切を果そ雑いさりき其の
後一千七百七十七年に於てスウエーデン國有
名なる化學者ヒーレ氏の発明さ㆑ーい塩化銀
なるものい赤色お緑色光線ふ當ふ易ーきいよ こゝ㆑次
ふ桔梗色光線ふ當ふ易ーきいよ こゝ㆑次
て一千七百八十年博士チヤールスやい諸義の
間ふ於紀銀液中ふ浸ーおりてる白紙のくへよ
う㆑塩酸なる日光をさらして生徒の形をる㆒正地
二白く抜もてる事ふ依ります 然ーてこ
の像そ唯室内の暗ふ止まりて若ー日光よ

嘉出そるこ㆑ふい忽形い消へて暗黒ふなそ
又忙てる㆒を再そる事ふいさります 其の後百もお
くウエッヂウードふ及いサー、ハムプレーの両氏
いチヤールスやと日一の試験を行い一千八百
二年ふ至て光線ふ生活ふ発き著名なる論説
を公布ーまた蒸風呂機の発明者なるゼームス、ワ
ットやも亦此の事ふ於ふ発意ーたそーう斯
くも名なる理學諸士の一人ーて選ふ亜像の創造
者ーる古湯ふ及ーまた亜像を止めんこと能そ
ーる㆒日光の秀ふ奪い去ふとたりき斯くお

まこの歸依と道とをものも歸と称する
み坊ふーて新く之を引歸ふ力法も佛も人も
名のためふ道ふをふ〜楠つら出たるも此の名
の名い各人の熟新をらう〜ゆ〜いのダキエー
ルのいニープスをも西氏の方法ふうて成
てたる者い即銀板写ふみーて各人い其後學者
のをふうて成ふる者をうるう〜ん此の
西氏と弘日好ふ英國人フオックス、タルボット
西氏を永代原板をうて日一の寿命をるーたそ
ーうを出うて弘〜十年間世界いるゐ御よふ祝

き著ーき進歩を見ることなうーゆふ一千
八百五十一年ふ於てコロジオン濕法いスコッ
ト、アーチヤー氏の考ふ成切をられ其の方法い
直ふ氏の弟ふ世ふ公ふをられけるい人〜
事てはの法を行ひ度〜世ふ宣用をられ先條
字生法中ゲ一法を白山ふ西ふて再景応人の
此の法ふ称き改良ふ改良をとうへたそーい実
ふありふみーて弘んと其のおぎり我ふさる
なてはのこうき改良の結果いコロジオン濕
法ふ妻態をまうこーー遠ふ迅速なる乾板の世ふふ

出現する壯觀を見ようと思ふ
ム爲其術の發明いそがるゝ五十有餘年のむ
かしを其の半世紀間の進歩は實に長大なふ
して戸外ふ一分間ばを夢やしたるかのダキ
ユール氏の銀板寫真をつゝみよ一秒五百分一
の瞬間をまわ違ひなくしてX光線を投へ
生物体中の骨格をもつて出すをよ以てそ
若し万一の發明者なるダキユールおよびニー
プス両氏も今日降靈のありさまを見ハ浮ハ
其の感覺をいかに表現せんかを云々

を要するもの多い芸數年間の進歩ハ社吾人の想
像し能はざるものあらん云々

寫生畫

寫生畫ハ花卉人物等ヲ取物ヲ其ノマヽニ寫シ出シ一毫筆意ヲ加ヘサルモノヲ以テ安藤度童曰ク寫生ハ畫ナリト雖モ寫生ト畫トアリ即チ畫ナリト云ヒ浮世繪師ハ寫生ヲ以テ畫ナリト云ヒ圓山應擧杉村呉春ノ徒ヲ以テ寫生ノ域ニ入ル後人ニシテ寫生ヲ學ヒ而シテ稽古ヲ積レハ寫生ヲ以テ畫ヲ觀ルニ至ルモノアリ故ニ寫生畫ヲ初學者ニ教ユルヲ先ツ運筆ヲ主トシテ學ハ

しめ運輸既ふ振るの後ふ毛ず始て学生を学
ハ一むこと是運輸を主として為生を後ふそゝ
学生ハ固らそこと是学家の一科として敬く〳〵
うふさるもの力ふ深く拘泥して運輸の肝要
なることなる高ふなれ

相撲画

本朝画用録に相撲人之図　一巻　画者墨克云
望河閣　高嶺云おのれ思ふに是しらつゝこハ岐原
墨克　土佐家の祖　息男阿閑梨巨勢云持ハ云云
ハ非なそと倉号志のこゝろやう
そさるふ出ず一図と田中訥言生もてるハ土佐
光吉　光信の孫光茂の二男刺新本のうつしなり
光吉ハ家長のうろハ人なきハ彼の古本をもて
画るなるつゝ云と　紀石庵
伴善雄　相撲の図　林戸
侯古画画古法眼元信　卯見右筆像　筆者伴ゟ

なりしが　嘉永相撲図　一枚　墓本同角泰充
北斗七星を押立ふあそ　相撲絵　墨充云生山川
阿蘭製業　旧千利久蔵　相撲人形　内匠北墨
光号春日　墓本土俵泰充
梅ふ渡世浮世絵師ふ〳〵相撲画を画く勝川春英
景世の画ふ長をそさせふこと力士の似顔画の
ミ称呼者略伝ふ二世鳥亭烏馬有能を好みて古
田退を机に行司の装束となりふ〳〵そうして相撲を
組図絵相撲全別伝図名所図等の著ありそ其画
い皆五法亭半図なりと

能相手絵

能相手絵ハ能おひ相手を画きたるをいふこ
ふを画くハ其の役を知るものふ依ふされを
蓋一画くこと能ハさるなり其の動作其装束等
の模様彩色各一定の法式ありて写章画工の能
くそる所ふあらさるなり室暦年間福王茂右衛
門といふる能役者ありて画を嗜み英一様の門人
能服為之ふ新き雪峯と号〳〵墓く能相手図を画
く逸人画史ふ福王雪峯白鳳翁とそ春右衛門
と称せ始画を英一様ふ学ひ後土佐ふ学ふ

善く能書を以て人と為る 画家人
名詩書ふ福王雪岑石 盛勝雪岑又白鳳彩と子
一巻ものつと称せ能書者なり初め画法を英一
蝶山学び後土佐の筆意ふ倣い所ふ能くその図
を画くを其画く所い濃彩精密ふして名格亦高
しと雖ども山水花鳥を画くに又水墨の画あり
天明五年三月没せ深川浄心寺ふ葬る画及び
をもて一時の門人其の後尾州の人大石真虎と
もるい水なを嗜み土佐画をよくせ松平乗
翁ふ仕て能くその図を伝ふ今真虎因りて故

実ふ詳ふなりと雖能くその図を伝ふ者ふつき能く学い未と雖
ふなをよくて能く能くその図を学い研究若ふ三年ふして終ふ之と
画きなりと以ふ其画巻物ふなりて今能く年家
ふあるて一如人伝ふ所
尾張の人なを画を毎ふ本郷の古画と模一種ふ
人物調度をなをふ能く其画遠ふ一格の筆
をなを天保の人迎世の画伯河鍋暁斎大蔵流
の狂言を悟ふ書ふ乙ふ家ふ宿泊を経け研究教年
大ふ深ふ所ありて又好ふて能くその図を写を頗

[illegible] 漢文 [illegible] 風俗画図 [illegible] を著わして
[illegible] と古美術 [illegible] その図を [illegible] 去年一と雅号 [illegible] 甚だ
[illegible] 法式 [illegible] として [illegible] 尖りいる [illegible] ものいお [illegible] 称もり 漢仲大
悲図 [illegible] 掲ぐる所の [illegible] 高嵩渓の [illegible] 楓と [illegible] 葉の [illegible] 頗いお [illegible] 盖し一紙
[illegible] 称する [illegible] 重宝中の [illegible] 逸品なり [illegible] 福王雪岑の [illegible] 秘蔵 [illegible]
世 [illegible] 有名なる [illegible] 何陽 [illegible] 称する [illegible] 所以 [illegible] 峻角 [illegible] 一幸ふ [illegible] 幸
[illegible] 称する [illegible] 所以なり

武者絵

吾妻錦重寸ふ山東京伝 [illegible] 延宝天和の [illegible] の [illegible]
枚絵 [illegible] つゝ [illegible] もの [illegible] を [illegible] 称する [illegible] 人 [illegible] あり [illegible] て [illegible] 又一ふ [illegible] 西の
内と [illegible] つゝ [illegible] 紙一枚 [illegible] 祖の [illegible] 大さ [illegible] あり [illegible] て [illegible] 又一ふ [illegible] 西の [illegible] 武者絵
[illegible] みゝ [illegible] て [illegible] 毋緑青黄 [illegible] 画 [illegible] を [illegible] もゝ [illegible] て [illegible] 所 [illegible] ぶう [illegible] ふ [illegible] 多 [illegible] 大
洋絵 [illegible] の [illegible] 今 [illegible] 如 [illegible] く [illegible] 如 [illegible] て [illegible] ぎ [illegible] いな [illegible] 如 [illegible] 称 [illegible] 重 [illegible] い [illegible] 上古 [illegible] の
土佐風 [illegible] みゝ [illegible] て [illegible] 高 [illegible] 如 [illegible] く [illegible] 一重者の [illegible] 名 [illegible] い [illegible] 称 [illegible] ふ [illegible] 云 [illegible] く
浮世絵 [illegible] 勢 [illegible] ふ [illegible] 鳥居清長 武者絵 [illegible] 場 [illegible] ふ [illegible] 上 [illegible] ま [illegible] ふ [illegible] 一
て [illegible] 元禄宝永以来 [illegible] 大 [illegible] 出 [illegible] つる [illegible] ものゝ [illegible] 如 [illegible] 一泉守一
町絵 [illegible] 小 [illegible] 幅 [illegible] 称 [illegible] む [illegible] へき [illegible] 名筆 [illegible] なり [illegible] 善 [illegible] く [illegible] 武者絵 [illegible] を [illegible] 重

くさぐさ　北尾重政　書画共ふうくを能中中板

下ゝ妙なる武者絵双紙石島土番一　勝川春英　自

然一家の筆意とあらいへ一粒重をうもて世よ九

徳風とりよ彩色重を本武者絵双紙数種

あり　勝川春亭　年松高雨又勝喜和宝町よ往

き武者絵双紙ふくく重々

枝と武者絵い古来土佐狩野の二家及い雪永の

流派ゝもよ皆ふくく重きかの土佐光信ゝ一

石合戦一巻在野ゝ推之ゝ絵と年合戦草紙三巻

土佐光顕ゝ六波羅合戦図おい皆武者絵の最古

きゝものなり　遊世の浮世絵師歌川国芳最武者重

よ妻ゝ天保九年の風ゝ書よ国芳の役者重い

妻是不ゝ相一武者絵ふもて可者ふてと行ゝ

南蛮紋者絵い国芳よ沿ゝ

世絆重高うもきれと国芳の武者絵い狩野家

よ指ゝふるのゝみゝて深く姓裏を正一重きゝ

ゝあゝふ其好代を考く古来を四一武者重を重

きゝゝい遊世の名ゝ勇池容斎よふくゝものなう

るつ一其著前賢古実よ詳ゝ

金右郎伝

享和二年正月永壽堂西村より板行額柱より七福
神とある草紙の事よ　清長画の金右郎事を
しるせるよへそ抄出したるもの也
一説哲社合より事あり尚春も例年の通さし出し
中に沸とあり下されてくれ
葉ふ享和年間金右郎伝寫ふ行ふる　其筆者ハ清
長のこふ所ふて一世歌川半國ふとも画まふそ
さと清長の如く行ひとれ　清長の画く所ハ画
法狩野家ふて出て　筆力超凡　他人の及ふ所ふ

[illegible] 甚年と云き出そる[illegible]ハ真に數一[illegible]余が書一
冊[illegible]きー[illegible]その外[illegible]みても 狛也有餘ありて 柳清長が
金ちる絵の行い是ー[illegible]ハ蓋唯其の筆力の超丸る
るゝふよるよりありさる なて清長の師ハ鳥居三代
清満ゝー[illegible]て清満の弟そる 其の子某ハ亜と學ハ
そしー[illegible]て 遊蕩を業をそー[illegible]をして 鳥居の亜法を持
ふるその外ー[illegible]として人皆相識ー門人清長とも
けて 絵を鬻ー[illegible]そんとした 清長独ー[illegible]て聽うけ 竟
其家ハ獨立ー[illegible]て一家をなそんを 欲そる なて後
よくその法ひて 絵ふよりて 忽一片の義俠心を

おこー[illegible]今若家を嗣き四代清長と称ー[illegible]たて志ち
ー[illegible]て 清満の孫の五六歳なるを 養育ー日歌亜法
を研究そー[illegible]め 絵ふ鳥居家を嗣ー[illegible]たて こゝろと四
代清峰と 絵と絵満 甚同清長ち善ゝ ー[illegible]て教育
をなそー[illegible]変ゝー[illegible]也人の為 所ちて 噴妻をさ
るそのあー[illegible]出板こゝふ 争ひてことを構ふこと
山積ち金ちるを 吉育そー[illegible]変ハ後世愚母育児の
龍鑑ー[illegible]て 侍ふ所なりこゝを以て 歌集人ハ金を
ち絵と 貴重そるこゝ 是ー[illegible]そて 年と出板を
数千の金ちる絵ゝ 弘稀ちるよりもて

化物往

まゝ師ぎつね、雪女うつゝ、山男、大うそ、山姥
土車ゝゝ入道雪籠波集小影ゝゝ入
道山の精鎌山井小豆ゝ雪の山
ゝゝの考古亜譜土佐光清筆の化物双紙一巻
ありて葉山よゝ懸とがみとの化物あを亜ゝ又
狩野守信筆の化物双紙一巻あり
青木年表寛政五年の条に文軒雨雲山頃ゝ
鳥山石燕著この絵本百鬼夜行四亜
図百鬼徒然繁れを著ゝて大小行ゝ寛政年間
みゆて絵ふ化物出ゝの手紙流行ゝゝ

化物出の本行乙政仲の乱
少ゝゝ妻ゝゝ
梅ゝ化物往の行ゝ日ゝ安永
天明の叶ゝゝゝ。

石燕ゝ化物の名ハ 狒々坊、高女、ろくろ首、牛ゝ
の影女又梅ふ亜図名類ふ百鬼夜行一巻亜先
童梅ふ四徳の説の古亜ゝ亜工狒々ふ日書
の書入ふ家系ゝ行秀亜又國朝書目ゝハ先吉亜
ゝゝて今考古亜譜ゝ図もゝふ土佐家百鬼夜行
と亜ゝゝ絵師ゝゝ光重吉光行秀光吉
光信筆ゝゝと亜ゝ光ゝもて更ふ新図を製
しゝて

宝永亜

嬉遊笑覧ふ宝永の亜ハ安南陸華ふ古代の書ふ
こゝを亜ふの枕ふ下ふ為くこと所見多し一ふ於
将軍の状をてふ此ふ氏の事あそ澤無河保将軍家の
天文永禄の慶書ふ云見ふ所ふ通節ふ此私信所
こゝろなり
い一両年工京小川屋ふて念書ふ記又其後将
野法眼弟子ふ峠石近とゝ仁ふ被著人ふ技将人
ふ其時ふ如くせらる又其後云方様光源院殿
ふ代ふ墓福山新立郎時ふ私ふ信ふ文云方様村
ふらく古上洛二條妙覺ふふと所ふ往ふ射長孝

振いは右妙覺寺と申所は左の方樣と申傳
樣い大川合は舩二ツ又は選子は所と申樣い小
川合上前中前御末女まで杉原口入次第乘
御進或好節は御書物にて御下向
樣の時は舩名ざまにて御乘
時使ひ二乘着日は前日は舩相河原むかへ舩を
書物は被節分は舩
まで御やしき右の文とうふむらいの筆
の義たゞ舩の絵を見ること云
因千句每年その

種〳〵のたから
うまて なりきよ
なりものてよ 称ものの
歌をかき添へて 元日ゟ二日の夜 委細よりき
筆を川よなうそ 呪ひ事なそゝ 又年神の来も
あるこゝろをもて 西ふ角の事ゟ 門家右直のそれよ 修よ
文罷重陰ふ節分の夜 門家右直のそれよ 修よ
たうゟ 松の重ハ 福固寺 久能住 権ま ハ 福陽城院
座敷ゟて 修文ま ゟも 宸刻ゟり ハの幸の 宸刻の
神代巻 磯泉坊 香住なゝも 玉ゟの 板ま ゟ

百沽のせ ふよ 焼失そゝを 高柱殿よりそ
て 翻刻そゝま ゟを 修つゝ 板ま なそ
内侍所ふおさゝ ゟも 節分の夜右直のもの
今も 陽ハ ふ 立像天神 今松原西門院の神宝
ハ金のたうゟ 西角
動座さ せたてま つそ 天明社 大火災のゝき
たゟふそ 町家 西座柱を清め
名代の神なそ 例年大晦日ま ゟ節分たうゟ 玉
の重を出ゟそゝを くゝ 修 寺 そゝとも
をゟへハ 神の叶影のこゝろよや ちぐん と

松本肥後守経亮ノ橋意自筆ヨリ之ヘルモ　宝永
古往来　勝川相模守京都ヨリ来ル　其ノ先祖
勝川新右衛門頼長入道ヲ写ヲ図ヲ頼ヒ
ころ永禄ノ軍政ヲ敷ヲ　其書ヲ写ヲ
ノ祖ハ南京ヨリ云ヲ
私宅ニ伝ヲ
筆ヲ　恵林院ハ牧ヲ進上物ノ内澤山林松茸
ヲ　祖又駿河ヲ進物ヲ
ル剛玄秘ノ書ヲ拝見中候ヲ古往来トソテ光源
院殿様ヲ代ヲ奉様ヲ作ヲ澤山調進中ヲ方様
妙貴ヲ　ハ私ヲ
紹下ノ
ヲ連枝師弟ヲ
ヲ

大黒経

我國各地ニ於テ大黒ヲ福ノ神トシテ尊ブ事ハ
茲ニ大黒ハ即大國主命ナル武重ノ話ト全ク
方ヨリ遊歴シ福ヲ大黒ヲ重ク尊ブ事如何ナル
得地ヨリ行ハレ又何ヲ重ケハ如ナル名ノ
重科ト云ヒ真ヨリ福ノ神トナリシヤ之虚構ノ談
ヨリ出タルカ故ヨリ古来重ク大黒ヲ重ク称テ多
シ逸人重史ヨリ亦師浄福ヲ以テ古洞ヨリ大黒ノ
像ヲ重ク世ヨリ古洞ノ大黒ト称ス我ガ年表延享
年間ノ條ヨリ深瞑大黒住

あさい山将軍去信濃ハ水戸の亜将ニて日比
出の太黒と亜ふ名あり

春亜

春亜ハ一ニ秘戯図春宮図おそくづの亜ともふ
亜男ハ亜又草俵ふともいを枕草紙ともいよ
婦女亜婦女ハ男女交合の図をつゝしてこゝろいい
つの世ゟゟやそしまけんさふふ説ゝる
ものゝ始ゟゟやハ西土ゟゟハ漢人の春亜持
ハ見ゟる春友山人の跋文ふえゝ多数ゟて
ハ能亜集ふ春亜の賛見ゟゟ能亜相伝ハ内融
院花山院の住宅の人ゟゟさふとこゟゟそしめ
ゝハいいめゝ支ゟそこのめゝハ雖頃春宮今

著聞集の往師賢季ら君子の師也後ろ春夫含
含ま往なと聞へらる世こと此の世往ふ
いおもくつとくんてあるらいおもいくつ
くつ詞の中君ろやと類聚名物考ふいつへと
ういうくあるんも一燭燈をおそらくいい
こうもあてけんよ注釈の首を燭燈ふたくへを
いおもしけんと小ろも祖母なけ
ほいいい孤もろや　青蘿路史云平家首僧人重
世也之所不見亦世之所未知也其重非徐非緒乃
重二千車鑿壁上乃是姑蘇沈雜之至山東一妻重買田
者聞彼處盜墓人妻發一墓則其下有數十石其重
皆作人物如今之春重間有雜男色者重法與隷訳
中有一碑上所重之人大率相類其華甚拙云く
能直集五巻ふ但馬うミたちう屋内ふさ
の重うちて往ふ男女けーうもふ
うとうとろふ　うーろそ下のうて往ハ
ちよまして舟をそうちとけてまう世たるうれ
灌頂巻い脊吉海子女　三石真部女の湖ヒ武者平
致光とつよそのもと春通ちそーこうそいきのぐ
いて重うけるうのちを本下往ふ古春ちて書重

の権輿ならん時代のものとおぼしくて
まゝ原本あてゝ
元年九月三日癸酉伊勢斎宮王濶子女王自二中河
衣一換二東河一入二在兵衛府一廿六日丁酉自二在兵衛府一
鴨河一入二野宮一々々雖レ有二造畢一不レ可レ過二今月一入也
又検所前野有二大殿人見一之事遠也諸人怪レ之廿八
日己亥夜盗入二野宮一盗二取侍女衣裳一未レ有二如レ此事一日
本紀略二年六月十九日丙辰於二野宮一無二瀧口武者
平致光一番通之由風聞仍云々奈良神祇官令レ仰二禁文一
近四日遠七日祈二申此事之実否一云々 著聞集畢

女會合圖ハ古今著聞集巻十一重圖云佐師大輔
法眼賢秀ノ弟子よりて
法師あてゝ
古今著聞集島羽絵の條よき上多共の書て
ハ多よ過て大よ書ていてう実よハ在ハ
きゝめよ結ぶこと
蓬左雑話日在前
蓬左雑話ハ在前ニ絵画の説或人の評よ述ぶ

小笠原を又ゝ遠〳〵春雨一枚ゝ挿し入ゝ
てゝいと忙の為めとて同じ〳〵ふ書の多〳〵なる歴
勝なりと答へまいりなる如くにて格とゝ〳〵ふ
を頃春夜山人路史をゝゝふ田首二士人花書多多
毎遍必置春雨一冊人問之曰張書多惹大此物祇
厭大笑也世傳花書皆無恐能言以掩魂耶とゝめて
祇如〳〵こゝ以耳食一て好事の我とハ〳〵けん
又按ふ甲曽祖ふ春雨を入ゝとゝゝと此等社こと
を詳解せ〳〵ゝやとゝめとゝゝふ此ゝ阪ふ伊賀
安帝も其所著鏡色淡沼孫ふ譲せらゝゝとゝ曰旌
梃の中ふ春雨の春めと例えおもて出陣のゝゝき
計画をゝゝ苟めを会ゝて出つゝハ其日此軍必
勝利ありとゝいひ例へゝゝて秘変称実ある事ゝて
ゝいふ人ありて按ふこゝ妄従なて夫合戦の勝敗
い時の運命い拙〳〵きしゝめき大ふ〳〵てハ大将の
賢愚ふゝゝて士卒の雪怯ふゝゝゝゝて
なて大将愚ふ〳〵て士卒怯なりハ例雨をゝゝゝゝ
ゝて勝利ありとゝハ例雨を按梃ふ例えおもて
こゝい好き人の所為なりと 逸人亜史ふ月号
雪鴻亜師の人信天翁と〳〵丹下と称せ叶せ称

又ハ春重ヨリ珍ナル中器明和某年京師池奥ノ翁ヨリ
活中活外ヲ〻ク鳥カヽル偶一典舗ノ倉庫ニ於テ
タヾ人皆ニヨヲ許ス大活ヲ活其ノ字ヲ采キヲ
ヨリ意下ヨ一ト小筐ヲ即チ其ノ春重カヽル如
何ヽシテカ其ノ唐ノ主人モ知ラヽルヲ唐ノ主人モ知ラヽルヲ
月岡氏ノ春重ハ其ノ物ヲヤヨリ人ヽ知ルヽ
ヲレハ京師ノ人皆渇ヲシテ其ノ価ヲ十倍ヲモ
知ラヽル 如師学之ヨ元飯田町十軒ホトヽ
某名刺ヲシテ百金トシテ若キ好ヲ春重ヲ好
ヨリ西川祐信ヨリ 重李春重ヨリ多ヨ意ヽ北

ヨリ知ラヽルヲ 其自重ヨリ春重板ノ如キ肉
筆ヲヽヽ春ヲ真世外ヨリ打ヨリ云ヽ 活世
往彩秀西川祐信ノ像ヲ如重云ヽ 祐信ハ活世往
春重ノ建人ト云ヒ一ト年百人女絵名定ト
ハ大図ノ隠一ヨリヲ重ヨリ後好春双ノ図ト
ハヽヽト板刻一枚ヽ玉簾ノ中ニ隠一ヨヲ重ヨリ
一ヨ公廨ヨヲヽヽ慶安比ヲヲ受ケ板行ヲ禁ヲ
ラヽ一ヨリヨリ云ヽ
好色春重用錦子一冊 二巨柳亭種彦ノ作ヨ一
宝永年間ヨリヲ元禄四位ヨリ好春重ノ印行

本百有餘の解説をなしたるものなり

抜ㇾ古葊人物画をもて著ハ春画を画うさまなる
ものゝ人物ハ裸躰にて学ひ給ふあらされ
ハ善悪を指摘する能ハさるなり又人物
を画くに真体を写すをよしとすれハ春画ハ人体の至粋を写すものも
通ずるなり之を画きて人体をつくらんと務るなり
西洋画家の人物を学ふ亦裸躰にてせしむるの如
し乃ち岡山嘉華老海芦雪の如
き皆勉めて春画を画きたるなり其画体く世ふ
ものゝ

春ちを石文晁乃ちを世の蜀池容斎ちを画き
かち治世経師ふもてハ義川師宣を始として
吉川長春英村政信ち指清長葛ち川歌麿菊飾北
斎歌川平国の諸ちを画うさまるものなりとハ
不なりて其ハ人物画家ふあてハ真ニ必用の材料と
ふへし

山水画

経事部言ふ南宗と北宗と山水と画きて人物花鳥の類を画く人少し其名石の如し明帝蘭曰画中唯山水最理深遠而意趣無窮故文人之筆山水常多若二人物禽虫花卉一多出二画工一雖レ生精妙一覧易レ尽（天寿筆）又李朝の宮殿山水の平遠なるもの又は唐土の景勝を写せる扇と一天北の間山川の峻険に於て和漢の別あるが如く唐土の画山水を写せる陰峻の形ちなるも和中

文人の造る所いはゆる渾厚平淡の趣なりと雖物
形の時に意外に出てたるはもとこれを主とせ
ず求めざるに奇をなすこれ本邦人の長所なり
形なきに本朝人是を描き出さゝる故なり
かなり其の表外の形は俗士の絢次より一歩もきり
所かへこれを好む性となりて古人
重を評するよ古の如き奇を描きて物形表外
の妙をうしなひ又は礼格を脱畧するのみ歎美
するあり為に本邦の画家に景物を想像より来
そして論ずる所形の気韻を考へざる故平淡浅枯の
図を製するなり又一ヶ所ありこれを物を識む
所一ヶ所飛騨を表象より出て唐土の画様より異なり
又かの一ヶ所唐土佐家にて造る頓て落石百出せ
ざる数の山水様に於て人物ふ点綴する常套の格
なり土佐氏は人物殿舎ふ精巧を盡すを主とし
そこに吾唐の遠法なり倭て主物殿屋ふ映常なる所の様未山川は其屈曲参差を有
するて之を平淡ふなすものなり此の如きは陳套
を今そして混濁なるもの法則なり為ふ経
書狩野家其の外は徒の本邦の真景を画くふ及

て形て土佐派の格をもつて馬遠夏珪の減筆の法を加へるて皴法は別より用ゐる所あるまゝにその規則と形とをもつて至りてこと今世の所謂和の山水体なるもの温雅なる真よ李郭の名山大谷を描きの為めに其の奇秀を捨りとつて更にといふ

金碧山水

玄圃餘録に「山水用金碧始于李思訓張璪中出濡清遠非大手筆不能也」とありて中林竹洞石文晁の徒等金碧を用ひて山水を画く特に伊川金碧を用ひてより〳〵百士哉の能を画くこと蓋し金碧山水らしき浮気をたゝものなるん

錦絵山水

錦画の山水を歌川廣重をもて始とす其と前錦絵山水ながらも西洋の画法ゝして即浮画と称する廣重の山水も又此浮画なるを事狩及四條の筆ゝをもてよく遠きの景をなし真ゝ遍ねく山水の最妙を行りしゝ東海道五十三次の画ふゝ本曽街道六十九次諸国名所百士三十六景等ゝ出ゝ次ゝ

嘉永年表天保十四年の條ゟ一立斎廣重の山水

錦画行ふ又安政五年の頃より浮世絵師歌川広重と七十二歳安藤氏重右衛門と称し普通の世態画をも画きて行いしかども晩年名所山水を画きて行いしこと又世も知る所なり

日本美術沿革誌に一立斎広重は彩色板下絵を作ることよく妙を得て中ごろ死せしも其生涯の間の如き遠近写法の妙を写すよりも寧ろ雨池口吻よく描ける所なりと

称する所の一家の画格ありて古人の称する所なり依て茲に一一載

其画法は先春年度の浮画を本となし特許ある四條の筆意より抜てこゝに載せるが如し先山水の主意をつぎよく其彩色は自いふ先其注意の点より最肝要なる広重人の及ばざる所以なり注意を抜ことよく妙を得ることは

く画きしより表を出て浮しより三世広重画法を得て画きしより行いたりしより止むに止まりて広重の山水の画法を得る者をよく結べるが如し実より賢むへきなりて広重の山水ちよ断言より行いたり輸

出日と云ふ形をとつて我国に於ても粗画の
ごときものを出し
更らに一の画著最近素人の横書をする所なり

粗画楽画

禅僧画法より画ける粗画あり又墨より草体
あるが如く草書を用ゐしもの
草書と用ゐるものごとを粗画といひ真書を用
ゐるものごとを楽画と云ふ 其国粗なりと雖も
真書を用ゐるときは粗画なり又た国楽なりと雖
も書を用ゐれば楽画なり粗楽は国様の粗
楽より出でて楽画の真なるものを各々なるなり
故に武人看色として楽画を水墨をもて粗画
となれり 看色は草書を用ゐれば

即粗画ノ水墨ヲ真筆ヲ画カレハ即赤画也

文人画

画禅室随筆ニ文人之画自王右丞始董源巨然李成范寛為嫡子李龍眠王晋卿米南宮及虎兒皆従董巨得来直至元四大家黄子久王叔明倪元鎮呉仲圭皆其正傳者朝文沈則又遥接衣鉢者焉夏及李唐劉松年又是李将軍之流非吾曹易學也

按ニ文人画ハ王右丞ヲ祖トシ待ヘテ董源巨然李龍眠米南宮ヲ元ノ四大家ニ至ル即南宗画ヲ指シテイヘルニテ李将軍ノ流即北宗吾曹ノ

没骨画

昔梁湯漫録云唐人畫祖筆祇曰宋初收江南西蜀徐熙黄筌父子皆入京師画花卉但以輕色淺染不見墨蹤謂之写生遂以墨筆画之謂之落草々略施丹粉而神氣生動悉其氣已言其不入格耳格既更不用墨直以彩色圖之謂之没骨とこれよりて没骨の名ありへたり

文晁画譜に張伯起工画能書云画花卉者有一図獨較俏乃蜀黄筌稱花百合皆無筆墨惟有五彩布

成一榻花一榻百合一本四五花々色如初開極
有二生意一信乎其神妙也時謂二之沒骨畫一近時の沈南
蘋黄石斎と云〳〵て新奇を出せるものなり〳〵て沒骨畫なりと云ふ論なし此邦のつけた
てと云ふ〳〵
上一寺に住して廣川画絃云沈南蘋石斎直畳色漬染南蘋時に沒骨
翎毛を描不筆石斎奉参
華一似一傾二黄石斎又子余書見一駒馬都尉王銑所一收徐
崇嗣沒骨華圖一其花則草芍藥也自二其破夢散葉落
蕾露蕊一以至二雛枝格側一皆寫二其花始終盛衰一如レ此其
他皆嗣一重花不一一皆不レ居二沒骨華也唐鄭虔著二胡本
草一記二芍藥一名沒骨華今王晉卿所一收獨石二沒骨一然
則在中所一論黄園一而得一之鄭は徐ふらんは沒
骨の芍藥のことよ

彩色

西川祐信彩色ノ長ヲ以テ常其ノ著作ニ比事ノ書ヨリ大意ヲ掲ケ之ヲ四ツ六法ニモ隨意賜彩トイヘル彩色ノ法ヲ概ネ初リヨリ終ニ至ルマデノ要キヲ抜彩ヲトイヒ稍ヲ略ヲヲ中彩色トイヒ詳ヲ詳彩ヲトイヒ古来ノ抜彩ヲトイフヲノ先ツ地繪ヲ施シ其ノ上ヲヲ思ヒ〳〵ノ紅具ヲ以テ淡クヌリテ衣紋筆ヲ墨ヲ以テ書キヲケ手後撰擇地紋筆ヲ他ルコトヲ塗ル仕立ヲイフ皆其ノ手源奇巧ヲ以テ志ヲモ

なし。高しと雖彩色の上にて墨書する時は筆勢
なよく紙面にて伝よく流通暢にて今世ら多を止む
高野の如き彩色い白紙よりよく地紙をつけ其の
墨痕を能出して経地よ経具を塗りて衣紋くま
をなし、主後撰様地紋等と雖も此の如くも
う好い筆勢もあるべくして伝なるべく経巻
今も細字よい塗分彩色を用ゐるなるを常経
清ようみして細字ふ字あるを伝一て極彩色ゐる
ても漫よ経具を塗〳〵、うよう彩色されい必
経よ茶褐そもものなるて古き経よ彩色の落ふる

その訳うよく二点彩色き故なて経地い軽文
茶千そもうのなて中彩色い墨路の上へ一面よ
経具をう計其の上を衣紋くまして仕ふるなて
衣紋くまい唐経ふい何色の衣書ゐてもそく
生臙脂ふて〳〵まを用ゐるなて此の故よ日本ふ
て仏像経巻師い今もこの流を用ゐる本経ふい
まく用ゐそ皆を〳〵の色ふて衣紋くまをな
もうなて経具塗い経分筆勢ふよきやうよ心
ゐ〳〵色〳〵

裏彩色

文晁画談に裏彩色宋朝より盛なる話と題して曰く画家者流より裏彩色と呼ぶ事古く侍りて何人の工夫より出つるを詳にせざれ偶劉言古社侍を図するより宗古いよ〳〵盛也忠部より彩る人物を画くに表より彩色をほどこして水墨軽微なるところあり此の沈説より物を以て表うらを塗るなり故より物を背せそ〳〵て別より筆墨の軽微を如くするなり中と河福建南禅師家の墨より元人毛益の猫の

幅を陰暈し暑色を左右に厚く塗り南を屡塗めたるもの
原本の如くなる能く其の出来栄に於て満足の表を
切望するかして又その
ようよう傚い妻らを彩色をしら始めて原
本の如くなる意を得たりと其子暁雲の話ぶを

人物筆法

英家の人物画法は元人物を画くよう古人名
公家を写しかくといえども十躰の外
を出てさらに其の意気は漢和おのおの異か
ら如くそれ其の真いわゆる折十躰
いわゆる能画二ヵ曰く閻錫点三ヵ曰く逸
逸点四ヵ曰く急流点五ヵ曰く曲雲点六ヵ曰く
兎筆点七ヵ曰く暗渡点八ヵ曰く正鋒点九ヵ曰
く飛露点十ヵ曰く南路点なるこれを筆法の大
意として三病の嫌いなくまた妻みくんとして人

人物とつくる時は十点の法を得ること因りて
能うとさまなる今後世の為よき古人の帖を
図よく張りて初心重術の助とすること為りて図
おく
一ニ曰く雖重点　此の雖重点は極真の筆法を
て石面よく雖とそうして重くうるを勢めうに旋
うて逆毛もうて雑なて濃重うていは五文満
章、隷書、行の書体、書祝、楷立本、周昉、呉道玄、韓求、朱
程等の筆法をうことを用ゐる和重うていは真重
よりの法とするそうようなて此法人物よ

うて十点の筆重を定むと雖鳥獣、花卉、木石、水
雲皆うよく従よ雖重点いは元来字生の用法なり
い諸点うよりて却て妙なて
右のごとく雖重点いを以て生をうつ
うて却る筆なるふ枝葉なてうつて浮て
生ふ如ううとを覚もて肝要うて
此の筆法いは如ううとめうに細ううにうぞあづ
ましもべこれてなく条をうきなるうとくふ
書て弱めうふ様ふをよて筆の含毛を計て

みてかく 自得なり 筆のそう如しみてもなる
る好ハ有ようなりつく

二ハ曰く 圀斜点 此の圀斜点ハ真の筆法ありて
和漢ともふるゝ体にして用文、実冊、古法眼、松
栄、永徳、山楽等ハ勿論にして皆この法なり南流の
画家ともハ此の筆法ありて無点ともハ真の様書ハ
て軽筆なるハ古風の圀斜点とハ別ちがたきめあ
るべし雑ゝ全般ハ此の筆法おゝくハ山水等
ふゝらよ遠くの筆法おゝくハこれを用ゐる
也

ハの筆法ハ所ゝおゝくへてもある筆なり筆
ゝるゝ有てもるやうなるもとも筆先許て
て書なるなり身一衣文筆序のおて所もよ
くゝ巻ふ便ゝ

三ハ曰く 速速点 ハの速速点ハ濃もてハ僧用
速陳所用 藤漢倭筆ゝ重ふハの筆法を見る我邦
みてハ用文実冊 或ハ不扁啓書紀祝典主筆の筆
法ふ等ゝ又へもうそ 十ハの重山水あるハハの法
又つもそ典主を筆人ものハ馬頭者の及ハさる
筆法なそ解使のゝちおのづからふゝてを表ふく

出つ風ー

年ハ仲ゝとゝもに真の筆法なを急ゐー
て古ふさゝを以て古ふ筆を好ふいそる
ふ出ふ以そこーつゝおーてつゝ松なり筆
の鋒と按分立てかくつーて文ふ雕虫点ゝい
ふあてそこーて文ふ仰ぐる如て生のそこたる
姿をいふ

四ヶ日く急法点 此の筆法ハ唐宋元の人ゝか
ゐ別て梁楷、馬和之、周文矩、元の黄大癡おの亜
ふゐゝそつゝて和亜ふい周徳、玉糸、雅糸亮乃い

注粉興点筆此の筆法あを右も古凡ーて真の
用筆なを南也この法を用ゐふ人錦なるう如ー
以上の四点ハ皆真の法ゝ以十海の中を約ちて
見ゝふ初め四品と真ゝー法き三品と行ゝー終
をと品と仲の筆法とそるつー
此の筆法ハ筆のもうんゝおゝふ所ゝてそうる
ぶふ如てそのおもむくふ所ゝをもうてまゝ
うへる筆も右のごゝー二旦真の仲と叫ふ風ゐる

五ニ日く曲雲点 此の法亦和漢ゝもふ用ゐる

和もてい主体静動雲母もとよ用句る漢もてい
王華、秋月、玉潤、呉道玄、李龍眠、曹仲玄用句るなる
衣文のさま雲の出るうちふ似もとをもて比
の筆法の名とそもとの衣古今和漢もふ比め
法を用句るなる
比の点い雲のいつるふ似もとを加たる名つけたる
なる所々もて筆を加へもて雲様の衣文を書
もてやもとなりめを加へなる物なり雲ふ併後も用
句るなる
六よ曰く石鮮点ハ比の画点ハ和漢もふ用

句るなる第六の雲紀を多みて中央もと真如仲
の三教の間ふ体ふ句ふらうちハ筆法を離もとうたる
なる
筆のおこさまを正もとい章序の衣文を
毫もとをけるもて行なるも真行草の三ツ一
体ふもて真をふ世ハ行もとなる所の筆法ふる
故ふ十体の中央なる比の暗過点ハ第一の雛型点
七よ曰く暗過点ハ比の暗過点ハ第一の雛型点
もと第二の画斜点をもて合もて行法ふ転もとる

なるを右五六七の三品を行書の法として古来和漢
諸家の用ふる所なり殊に古法眼ある人物のこれ
らを学ぶ時は其の為筆法を用ふるを以て
以の筆法は第二の間斜点を要めと雖間斜は
筆の常法をつゝしみおもくして中を軽くそこめ
間斜は常法を軽くして中をおもくしてかゝ
て放ち間過といふ
八十曰く光筆点ごとは光りある筆の様いあて
ごとし古来和漢古今ともに用ふる所一の雛型点
第六の画解点を和らけなるをもちひ筆をも

て更に草ふ和らけなるを雪舟流狩野家のい
ふ画法の重点筆法の法を重く墨熱の人のいか
なき筆法なるを
以の筆は古来ともかくと云ふ所なるを用ふる
くふ行くなるを必筆先きの切るるを用ふる
みあるく秀る字にて書なる形なる筆のう
そこ肉を去てかゝる姿を要
とす
九十曰く題露点ごとは仲恵なる和漢共ふ之を
用ふる狩野派雪舟流思善等の筆みるく又る所なるを

和の仲書ハ信――て之ゟ経ゟ是まての筆法ハ筆
勢を肉ミつゝ
那露の法ハ筆のゆくゟまゝせ筆勢をたゝてゟ
ゆゝゟゟゟ之南流事ゟの法を用ゐる
筆の勢ゟゝ――なゟて所をきび――筆先
筆をゟゟゟゟ而も自然ゟて急なゟを
仲ゝゝ筆のゟゟゟ――きらふことゟ
十ゟ曰〳〵南路点　清ゟてい牧渓、玉澗、顔輝、辛夷、
月山、簡次平、高然暉、朱元章、等ゟ見へゟゟ和ゟ
てハ雪舟雪村筆就雲渓ゟの採也永真主馬或ハ

筆伯友松筆塔ゟの法を用ゐる元仲亜の法破筆
飛白筆ゟ――ゟ雑書八九十三名の中を出てゟ葉
筆刷毛筆をゐゐて亜くゟ塔ゟの法ゟて真ハ坐
ゟゟゟ如〳〵行ハ歩ゟゟゟ如〳〵仲ハ走ゟゟ如――
筆史次第ゟ急なゟを知ゟて――
草の筆ハ墨の濃淡を生ゟゟて――ゟきとゟゟを
きゝとゟて仲亜の書一ゝゝ